

## 2021年度小倉奨励賞の受賞者決まる

**受賞者：**岩崙利勝（富山県高岡市立中田中学校）

**研究題目：**日常生活の気象変化の観察に根差した中学校気象教育の実践

**選定理由：**

岩崙利勝氏は、38年間に亘り富山県高岡市の公立中学校理科教員として、主として理科教育を、また技術科・数学の教育も担当してきた。理科教育に携わる中で気象分野に興味を持ち、平成11年に気象予報士の資格を取得し、これを契機に、日常生活の中でも身近な自然現象である気象の教育方法を模索するようになった。

気象現象は、日常生活で直接体験できる自然現象であり、天気予報は日々の生活の大事な情報である。義務教育の中学校の段階で、生徒達が気象について基礎的な理解を深め関心を持つことは、防災に対する意識を高める上でも重要である。そこで、岩崙氏は、身近な自然である気象に触れて学習できる機会を持てるよう工夫し、気象教育を実践してきた。

最初は、放射温度計により雲底温度を測定して、雲の分類を試みることから始めた。また、気象観測装置を教室から見える校舎屋外の場所に設置し、観測データをオンラインで校舎内に転送しリアルタイムで気象観測データを見られるようにすることで、身近な観測による気象データへの関心を持たせる工夫をした。この校内観測データをインターネット上

に送り、生徒たちが自宅でも観測データを確認できるようにした。同時に、気象庁による天気図や衛星画像などオンラインの気象データを自動取得するようなシステムをRaspberry Piにより構築した。これら気象データを授業で活用したり、季節毎の特徴的な天気に関する解説ビデオを作成して校内で常時再生しておくようにしたりするなど、生徒の気象への理解を深める取り組みをした。さらに、発展的な学習として、数値予報の基本やレーダー画像の見方についても取扱い、生徒が校区の天気予報に関する発表をする機会を設けるなど、天気予報への理解を深める教育方法を実践した。

近年は、考える防災・減災の授業に力を入れてきた。技術科や総合的な学習の時間で扱っている防災・減災教育において、気象学習と関連づけることで、警報や特別警報、避難指示などが発表される理由について理解させる取り組みをした。例えば、技術科で、生徒各自が自宅付近の状況をハザードマップで確認し、気象災害が予想される場合の「マイ・タイムライン」を作成し、主体的に判断して避難行動をとることが大事であるという考え方を身につけられるような取り組みをした。そして、このような実際的な授業を組むにあたっては、富山地方気象台、気象予報士会北陸支部、高岡市役所危機管理室などと連携をとりながら行ったり、ホームページや

新聞取材による情報発信も活用したりするなど、気象学習が広く社会全体に関係するものであるという理解を生徒に与えられるよう工夫している。こういった教育面での業績は、岩嵯（2019a, b, c）により発表されている。また、授業以外にも、科学部における気象データを活用した研究にも注力し、生徒自らが行う機器の製作やプログラミングを継続的に支援しており、指導した生徒による調査の成果は日本気象学会のジュニアセッションで発表されてきた（高岡市立志貴野中学校 2017a, b；高岡市立中田中学校 2020）。

以上のように岩嵯利勝氏は、中学校という中等教育の現場において、身近な気象の変化について観測を基本として理解させる独自の気象教育を実践し、さらに気象防災に係る教育にも取り組んできた。長年に亘るこのような気象教育の実践は、気象学の裾野を拓げるという観点において大変優れていることから、岩嵯利勝氏に2021年度日本気象学会小倉奨励賞を贈呈するものである。

#### 参 考 文 献

1. 岩嵯利勝, 2019a: 学習を生活に役立てる気象単元授業の実践. 第51回東レ理科教育賞受賞作品集, 公益財団法人東レ科学振興会, 6-9.
2. 岩嵯利勝, 2019b: 気象学習を身近なものとし, 関連づけて将来地球環境を考えようとする中学校理科教育の実践. WNI気象文化創造センター「第9回気象文化大賞」助成報告書, 7pp.
3. 岩嵯利勝, 2019c: 生徒の興味関心を高める中学校気象単元の授業実践一窓から気象学習一. 令和元年度日本気象学会中部支部研究会, 富山大学, 2019年11月28~29日.
4. 高岡市立志貴野中学校, 2017a: 夏の富山県南西部地域性降水に関する研究. 日本気象学会第3回ジュニアセッション.
5. 高岡市立志貴野中学校, 2017b: 大気圧日変化の研究. 日本気象学会第3回ジュニアセッション.
6. 高岡市立中田中学校, 2020: 富山県でみられる海陸風の研究. 日本気象学会第6回ジュニアセッション.